

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00695

研究課題名(和文)話しことばの記憶の伝承：消滅危機言語とされる宮古島のことばの映像アーカイブ構築

研究課題名(英文)Transmitting the memory of oracy: making a video archive of Miyakoan, an endangered language

研究代表者

藤田ラウンド 幸世 (Fujita-Round, Sachiyo)

国際基督教大学・教養学部・客員准教授

研究者番号：60383535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：2020年現在、沖縄県宮古島の宮古語を「流暢に」話す話者は80-90歳代である。本研究では、「ことば」と記憶を動画で記録し、次世代に継承するためのアーカイブ構築を目指した。

宮古語は生活上の「話しことば」として宮古島の文化や生活世界の意味体系に直接関わっている。宮古語はすでに家庭の中で自然な継承はされていない。宮古語を話せる祖父母世代が存命のうちに、孫世代に島のことばや固有の文化について意識的になる機会を創出することは、今後の言語継承を左右する。

本研究では、島人との協働を重視し、「音声」と記憶の「文脈」を切り離さずに動画で記録することで、先人の記憶から「ことば」を伝承できる様式にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、沖縄県宮古島の消滅危機言語の「ことば」と文化の活性化を目指し、1)宮古語話者や集落の生活を映像で記録、2)地域に根差した記録として島人と協働したことである。具体的には、ドキュメンタリー映画1本(46分)、三つの集落の映像アルバム3本(10分)、宮古島特有の文化や風景の映像クリップ6本(1-5分)の合計10作品をYouTube上で公開し、宮古島の将来の話者に継承の手がかりを残した。

研究成果の概要(英文)：In 2020, the 'fluent' Miyakoan speakers of Miyako Island City, Okinawa prefecture, are already in their 80s/90s. The present research has aimed to record their 'language' and memories by video and built a video archive as a system to transmit Miyakoan for the next generation.

Miyakoan language is a spoken language without orthography, mainly used in the daily life of islanders. The language has no longer been transmitted naturally among families. Therefore, it is critical to create opportunities to raise the awareness of the grandchildren about the local language and culture while their grandparents, Miyakoan speakers, are still alive. This is vital for the language transmission.

In this present research, I articulated the collaboration with the islanders and treasured the style transmitting the language directly from the memories of senior islanders by recording 'their language' as it was, without cutting 'sounds' out of 'contexts'.

研究分野：社会言語学・応用言語学

キーワード：社会言語学・応用言語学 バイリンガリズム オラリティと消滅危機言語 映像アーカイブ 言語の再活性化 日本のマルチリンガリズム アクションリサーチ 21世紀のグローバル教育実践

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)日本に現存する言語の多様性、マルチリンガリズム研究の可能性と深化をテーマとする。本研究は構築主義の立場に立ち、質的研究からの新たな研究アプローチの可能性も探求する。研究の基盤は、20世紀の日本のマルチリンガリズムをもたらした通時的な近代化の歴史を消滅危機言語から見直し、消滅危機言語の一つである宮古語・宮古島市のフィールドワークから少子化の日本社会の現象を描きだす歴史のリフレクティブの視座である。

(2)フィールドワークでは、現在ご存命の宮古語・日本語の均衡バイリンガル話者へのインタビューの映像収録、小学校・中学校での映像ワークショップを通してのアクション・リサーチ、1と2の映像を用い、最終的には宮古島のことばと文化のアーカイブを構築する。アーカイブの構築は、次世代の義務教育にある地元の子ども用学習素材、日本全国の教育現場での消滅危機言語の素材としてタブレット教育にも対応ができる様式を目指す。

2. 研究の目的

(1)宮古語と日本語の二言語使用者はバイリンガルである。山本(2014)や国内外のバイリンガリズム研究者らは、二言語をバランスよく聞いて理解し、さらに自分の言いたいことをその言語で表現できるバイリンガルを「均衡バイリンガル」と定義する。研究代表者は、2012年から宮古島でフィールドワークを開始し、様々なネットワークを形成した。宮古島市の3つの集落で小学校、中学校、学童保育所、老人のためのデイサービス、図書館などで参与観察やインタビューを行い、宮古島市の6歳から92歳の中で、自由に、流暢に宮古語が話せる均衡バイリンガルはほぼ80歳代以上であり、宮古語はすでに家庭の中では継承がされていないことがわかった。

(2)この宮古語を話せる祖父母世代が存命の間に、自らの「記憶」を語ってもらい、宮古語で話す動画を残すことで、宮古語の音声や目に見えないことばの文脈をそのまま残すことができる。こうした動画をアーカイブ化し、孫世代や次世代の小学・中学生たちに残すことで、ことばの再活性化を目指すことにした。その背景には、言語理論では拾い上げられない、抽象化がされていない、生きた「言語」をいかに研究するのかという社会言語学の原点ともいえる話しことばの研究の視座を再認識した研究代表者が、地味ではあるが島の「歴史」を島人に直接口頭で尋ね、その様子を動画として「音声」と「文脈」を切り離さずに記録をすることに可能性を見出したことがある。すなわち、宮古語は主に生活で使ってきた「ことば」であり、宮古島の文化や生活世界の意味体系に直接関わっている。均衡バイリンガルの人たちの「ことば」を記録するということは近代化の前から生きていて、しかし、近代化の進行と共に消えつつある文化やオーラルヒストリーを記録することでもある。

3. 研究の方法

研究代表者は質的研究を行い、その方法論としてはフィールドワーク、インタビュー、参与観察に加え、学校の場合は子どもたちの意識調査などのアンケート調査も行った。本研究では、新たな研究アプローチを模索するため、3つのプロジェクトを組んだ。分担と役割は以下である。

<プロジェクト1 P1: 映像による話しことばアーカイブ構築>

研究代表者: 藤田ラウンド幸世(国際基督教大学)

研究分担者: ジョン・C・マーハ(国際基督教大学)

研究協力者: 服部かつゆき(映像アーティスト)

研究協力者: ビバ・イエリサヤ・セスナ(リングアパックス・アジア理事長)

<プロジェクト2 P2: 映像を説明するための宮古島フィールドワーク調査>

研究代表者: 藤田ラウンド幸世(国際基督教大学)

研究協力者: 服部かつゆき(映像アーティスト)

研究協力者: 佐渡山政子(宮古島の民話採集家、民話集を多数出版)

<プロジェクト3 P3: 子どもたちのための映像ワークショップと映像制作>

研究協力者: 服部かつゆき(映像アーティスト)

研究協力者: 近藤崇士(宮古島市立久松小学校教諭、2020年3月当時)

研究代表者: 藤田ラウンド幸世(国際基督教大学)

本研究の特徴として挙げられるのが「協働」というアクションである。プロジェクト1から3においては、研究者の藤田ラウンドと映像アーティストの服部の協働、さらに、研究者と映像アーティストの東京チームが宮古島の地域協力者との協働を行った。

プロジェクト3は、2019年度の1年間は実施したが、2020年度は新型コロナウイルスのため、予定していた中学校での映像ワークショップは中止となった。その代わりに、プロジェクト1と2に集中し、2で行ったフィールド調査時の映像を1のアーカイブのコンテンツとして制作した。

4. 研究成果

(1)宮古島の「記憶」の映像アーカイブ

まず、研究成果として、アーカイブのコンテンツを挙げたい。ドキュメンタリー映画1本(46分)、三つの集落の映像アルバム3本(10分前後)、宮古島特有の文化や風景の映像クリップ6

本(1-5分)の合計10作品である。詳細は次の表で示す。現状は、8作品がYouTube上で公開されており、未公開のドキュメンタリー映画に関しては、2020年5月にイタリア・ベニスのCa' Foscari大学で開催予定であったFirst Conference on the Endangered Languages of East Asia (CELEA1)、2020年8月にベルギーのアントワープ大学で開催予定であったヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies)に招待されていたが、コロナ禍で延期になり、前者は2022年5月、後者は2021年8月の学会で上映予定である。この後に、インターネット上で一般公開をする。もう一本の未公開動画は現在、肖像権の許可待ちである。

	映像タイトル	映像時間 (分:秒)	制作年
1	ドキュメンタリー映画「みゃーくふつの未来:消えゆく声、生まれる声」(*学会上映後、2022年夏に公開予定)	46:10	2019年
2	久松アルバム「海神祭」:2015-2019 英語字幕付き	13:19	2020年
3	池間島アルバム「宮古節」:2019 英語字幕付き	14:53	2020年
4	佐良浜アルバム「半農半漁」:2017-2021 英語字幕付き	9:58	2021年
5	與那武岳金兄小(ユナンダキカニスザガマ)と兼久畑(カニクバタ):與那城美和が歌う宮古島の民謡	4:39	2020年
6	十六日祭(1)お重を準備する	2:39	2021年
7	十六日祭(2)ご先祖様とのお正月	3:03	2021年
8	平良図書館北分館	1:58	2021年
9	漢那諒くん(小学校2年生)「通り池の人魚の話」	2:45	2021年
10	池間島の学校にがい(*肖像権の許可後、公開予定)	4:51	2021年
収蔵場所:ウェブサイト「多文化共生を再考する」 https://multilingually.jp [動画と写真]			

映像の1は前編と後編の二部構成で、前編は宮古語の現状を理解するために孫世代と祖父母世代のインタビューなどから宮古語に対する意識を描き出し、後編は宮古語をどのように活性化できるか、2015-2017年の間に取材をし、参与観察をした宮古語の活動や教育実践を紹介し、島人の思いや展望をまとめた。2, 3, 4は映像アルバムとして、久松、池間島、佐良浜の3つの集落でそれぞれ特徴的な年中行事や文化背景を描き出した。いずれも、2015年から何度も足を運んだ集落であり、地元で協力者とキーパーソンがいた。1と3は藤田ラウンド、2は服部が中心となり、企画した。5は宮古島の唄(民謡)、6と7は一つの家族に密着した宮古島独特のお正月であり、先祖との交流(お墓での食事)である。8は長年、地元で愛されてきた元県立図書館、後に平良市の図書館となった北分館で、2018年に取り壊しが決まり、すでに存在しない建物である。9は小学2年の漢那くんが宮古語で語る民話で、10は池間島の学校内にある御嶽(うたき)で司(神女)が学校の先生、親、子どもと共に高校受験合格を願う動画である。このように、宮古語という話しことばと宮古島の文化が一体化していることを動画で理解できるように示した。宮古島の日々の営み(半農半漁)、年中行事(海神祭、宮古節、お正月、学校願い)、日常生活の楽しみ(民謡、民話)、心の原風景(北分館)を動画で記録したといえる。

(2) 書籍

連携研究者のJohn C. Maherが編者であるOxford University Pressから出される書籍、Language Communities in Japanはコロナ禍で1年出版が遅れたが、この書籍の第4章に藤田ラウンドがSouthern Ryukyu Languagesを執筆した。ここの科研の調査が反映されている。

(3) 映像ワークショップ

2019年に宮古島市の小学校6年、40人に、学校と映像アーティストと研究者の協働で、総合学習の中で1年間に3回映像ワークショップを実施した。科研費で購入したiPadを用いて、映像作品を作るための撮影と編集を学んだ。この子どもたちに祖父母たちへのインタビューという形で映像を撮ってもらう予定であったが、コロナ禍で2年目の肝心の撮影は中止となった。

しかし、2019年度の3回の映像ワークショップでの、参与観察と子どもたちの映像が手元にあり、今後、これらをデータとして分析し、本研究当初の目的である質的研究からの新たな研究アプローチや消滅危機言語の再活性化につながる新たな教育実践の可能性を見出したい。

<参考文献>

山本雅代編著(2014)『バイリンガリズム・バイリンガルとは』『バイリンガリズム入門』大修館書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 藤田ラウンド幸世	4. 巻 46
2. 論文標題 アジアの文脈における国際結婚家族とバイリンガル教育：韓国とタイの親が実践する子どものための日本語サークルの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア文化研究	6. 最初と最後の頁 91-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 John C. Maher	4. 巻 14
2. 論文標題 From Dante to Fishman: Migration in Sociolinguistics and in the Language Situation of Ireland	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア・アフリカの言語と言語学 (Asian and African Languages and Linguistics)	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田ラウンド幸世	4. 巻 3/4
2. 論文標題 宮古島の「現在」をドキュメントする：消滅危機言語の言語復興へのアプローチ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Rikkyo ESD journal	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺幸倫、宣元錫、藤田ラウンド幸世	4. 巻 37
2. 論文標題 越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査：国際結婚した在外日本人父親の言説分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 相模女子大学文化研究	6. 最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 12件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 藤田ラウンド幸世
2. 発表標題 学校教育の中でニュー・スピーカーの意識を育てる：宮古島の小学校で行った映像ワークショップの実践報告
3. 学会等名 第12回琉球継承言語シンポジウム（会場校：琉球大学、オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round
2. 発表標題 Transforming resources into webinars and YouTube
3. 学会等名 JALT (全国語学教育学会) 46th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round
2. 発表標題 Documenting the local voices of the Miyakoan endangered language in the video: a linguistic ethnography of the awareness of their language
3. 学会等名 International Interdisciplinary Conference 2019, On the Move: Indigenous Knowledge, Language and Culture, Tourism and Creative Economy in Asia and Beyond (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 藤田ラウンド幸世
2. 発表標題 特別シンポジウム 英語以外のCLIL実践について考える：多言語多文化への対応，消滅危機言語のみゃーくふつの言語復興とCLIL：宮古島の小学校での統合的な学習の試み
3. 学会等名 日本CLIL教育学会第二回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 藤田ラウンド幸世
2. 発表標題 消滅危機言語（宮古語）の未来をESDと地域の視点から捉えなおす日時：2019年12月6日（金） 17：30～19：30場 所：立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム 主催：
3. 学会等名 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ESDによる地域創生の評価とESD地域創生拠点の形成に関する研究」（研究代表者・阿部治）・ESD地域創生研究センター（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round
2. 発表標題 Recognising Multilingual/multicultural Identity at a Local Elementary School: a Classroom Ethnography of Miyakoan Language revitalisation through video workshop
3. 学会等名 The 5th Colloquium, Language Education in Global and Multilingual Context (LEGMC) Research Group (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 Japan, Diversity, Language and Culture
3. 学会等名 Japan Society for the Promotion of Science (招待講演)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 What is Sign Language?
3. 学会等名 Japan Federation of the Deaf (招待講演)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 Japanese Place-Names and Multilingualism in Translation November 1, 2019
3. 学会等名 Huazhong University of Science and Technology, Wuhan, Hubei, China (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 藤田ラウンド幸世
2. 発表標題 ドキュメンタリー映像「みゃーくふつの未来：消えゆく声、生まれる声」の制作
3. 学会等名 第10回琉球継承言語シンポジウム2018年3月24日，琉球大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round
2. 発表標題 Linguistic ethnography of school-age pupils in Miyako Island, Okinawa---bilingual use of an endangered language and Japanese by younger generation.
3. 学会等名 The 22nd Sociolinguistics Symposium, Auckland University, NZ (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round & Katsuyuki Hattori
2. 発表標題 Researching and creating a documentary video about an endangered language in Japan--- a challenge of sociolinguistic action research after multilingual turn.
3. 学会等名 The 22nd Sociolinguistics Symposium, Auckland University, NZ (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round
2. 発表標題 Documenting Miyakoan language, an endangered language of Japan: sociolinguistic action to raise awareness of the linguistic diversity within Japan.
3. 学会等名 Department Faculty Development Workshop, Mahidol University, Thailand (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤田ラウンド幸世
2. 発表標題 消滅危機言語,宮古口のエスノグラフィー 学校と集落のフィールドワーク調査の記録
3. 学会等名 社会言語科学会第42回大会, 2018年9月23日, 広島大学 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 Keynote Speech. Multilingualism and Translation
3. 学会等名 International Society of Cognitive Translation Studies, Hokkaido University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sachiyo Fujita-Round
2. 発表標題 New Speakers in Miyako islands--- "Myakufutsu" speakers in the endangered language context of Ryukyu, Okinwa
3. 学会等名 The 4th Language Education in Global and Multilingual Context Colloquium
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 Pkenary Speech.The Census, Language and Multilingualism.
3. 学会等名 The Japan Society of Language Management Symposium, Dec 20th, 2018, Tokai University (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 Japan, Diversity, Language and Culture.
3. 学会等名 Japan Society for the Promotion of Science 日本学術振興会, Feb 29, 2019, Monterey Hotel, Japan. (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 John C. Maher
2. 発表標題 From Dante to Fishman: The Role of Migration in Sociolinguistics and in the Language Situation of Ireland.
3. 学会等名 第20回東京移民言語フォーラム国際シンポジウム, 2019年2月28日, 東京外国語大学 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 John C. Maher	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Eugene, Or. : Resource Pub.	5. 総ページ数 64
3. 書名 Prayers before a river : a beginner's guide to prayer	

1. 著者名 John C. Maher	4. 発行年 2021年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 239
3. 書名 Metroethnicity, Naming and Mocknolect	

1. 著者名 藤田ラウンド幸世、他29名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 都政新報社	5. 総ページ数 232
3. 書名 多文化共創社会への33の提言	

1. 著者名 John C. Maher, Sachiyo Fujita-Round, 19 other authors	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 not known yet
3. 書名 Language Communities in Japan	

1. 著者名 Sachiyo Fujita-Round (Chapter 11), Heinrich, P. & Ohara, Y. (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 464
3. 書名 Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics	

1. 著者名 John C. Maher (Chapter 8), Heinrich, P. & Ohara, Y. (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 464
3. 書名 Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics	

1. 著者名 John C. Maher (Chapter 6), S. Montanari and S. Quay (Eds)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Mouton de Gruyter	5. 総ページ数 422
3. 書名 Multidisciplinary Perspectives on Multilingualism	

〔産業財産権〕

〔その他〕

多文化共生を再考する http://multilingually.jp 宮古島 伝承の旅 https://miyako.ryukyu http://mutlilingually.jp https://miyako.ryukyu
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	MAHER John C. (Maher John C.) (50216256)	国際基督教大学・教養学部・特任教授 (32615)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スペイン	Complutense Universidad Madrid	横浜市立大学		
スペイン	Complutense Universidad	横浜市立大学		